

17 葬儀



鉄砧山の墓地を寄贈した後の大甲鎮長
郭金焜
M45卒



葬儀が行われた大甲公学校運動場 昭和13(1938)年撮影
「大甲老照片專輯二(提供周振昌)」引用

鉄砧山南麓の哲太郎の墓

弔 辞

大正13年12月30日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。先生は明治32年2月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘20有6年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる。その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気奪い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす、嗚呼哀しいかな。聞けば往事、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出廬し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、26年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す、大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高樓に入り、我れ情誼の校舎に記居す。彼、巨万の富を有するに対し、我れ数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、孰れが貴きか未だ量る能はず、不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり、然るに名慾利情に勝つ先生は、終に健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし、志賀死すとも徳は死せず、不肖を薰化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はむことを。

門下生 吳淮水 敬拝



台湾文化協会
吳淮水
M43卒

葬儀は翌12月30日、教え子たちの手により急遽準備され公学校の校庭で行われました。導師は台中の日本人和尚(おしょう)大野鳳洲(おおのほうしゅう)で、教え子の吳淮水(ごわいすい)ら数人が弔辞を捧げました。式場外では、媽祖祭(ばそさい)同様に千余の爆竹が鳴らされ、大甲の街は喪に包まれました。教え子と生徒たちは靈柩(れいきゅう)に随行して鉄砧(てっちん)山麓の墓地まで行きました。この墓地は、哲太郎がかねて死んだらここにと希望していたところです。葬列は1kmに連なり、沿路の商店や民家は、路傍に机を出し供物を並べ、線香を立て、金銀紙を焼き、爆竹を鳴らして礼拝し、街中の皆が嘆き悲しんで大甲の聖者を見送ったのです。